

ターミナルケアと生死観

長 倉 伯 博

はじめに

とても丁寧なご紹介をいただきました。そんなに立派な人間じゃありません。お前は変わったことを鹿児島でやっているから、その話を皆さんに少し紹介しろというお話を学長先生からいただいたので今日ここに立たせていただきました。

京都光華女子大学の皆さん、皆さんにお会いできたことを素直に喜んでいきます。そして、ここに立った印象で言いますと、僕も皆さんぐらいの頃には大人のつもりでいしましたが、若かったんだなあ。うちの妻も随分若かったんだなあと思いつながら今こ

ここに立って……。その皆さんに五十も遙かに過ぎた人間がどんなお話ができるかなとも思っております。

さて、僕は今日、一枚の色紙を持ってきました。『日々に感謝 出逢いに感謝 生きてる全てに感謝』と書いてあります。書いたのは五十歳の方、亡くなられる二週間前に書いたものです。三枚いただいたのですが、そのうちの一枚を今日持ってきました。この方は、肺ガンの末期でした。「やっとこんな気持ちになりました」と言っていて僕に渡しました。『生きてる全てに感謝』と書いてありますけれども、「この『全て』には、先生、癌も入ってるよ」と。「あれ、前は違ったでしょ」「いや、今は十分、癌に感謝している」「本当は大嫌いと言ってたじゃないですか」と言いましたら、「いや、そうじゃないんだ。今はこの病気になったおかげでたくさんのお逢いがあった」そして「お坊さん、泣かしてやろうか」って言うんですね。ニコッと笑って。そして何て言ったかと言うと、「先生、病気にならないとあなたに会えなかったろう」と。僕、思わず涙ぐんでしまいました。それで「病室ちよつと出るよ」と言って出ていきまして、廊下で少し涙ふいてたんです。そして病室に戻ってきたら僕の目が赤かった

ターミナルケアと生死観

んでしょね、「わーい、坊主を泣かしたった！」彼の目も真っ赤でした。

そしてもう一枚の色紙にはこう書いてありました。「百億の民に百億の母あれど我が母に勝る母なし」お母さんは七十八歳です。それを僕に渡すんですね。百億人間がいたら百億人のお母さんがいるはずだと。その中で自分の母ちゃんは最高！という色紙です。おかしいと思いませんか。何故この色紙を僕に渡したのでしょうか。この言葉を聞いて一番喜ぶのはお母さんのはずです。でも、それを僕に渡した彼の思いが分かりますか。渡す時に、これを差し出しながら、頭を下げて「頼むぞ！」という感じなんです。僕はしつかりそれを受け止めました。彼は何を考えていたかと言うと、自分が死んだ日のことです。泣き顔を見せずに一生懸命看病をしたそのお母さんが自分が亡くなった時にどれほどショックを受けるか彼は分かっていました。でも棺の中から「お母さん、ありがとう」も言えません。だから「頼むよ」と言うわけです。つまり、棺の中に入ったら声は出ませんから、落ち込んだお母ちゃんに「お母ちゃん最高！」という言葉を送ったのです。うちの医療チームはできる限りお通夜に参列します。その色紙を持って行ったら、元気良く看病してたお母さん、一回も自分の

息子のベッドサイドで涙を流したことの無いお母さんです。そのお母さんが誰かが支えてあげないと立ち上がれないくらいに落ち込んでました。そこで僕はお通夜のお坊さんのお経が終わってお話が終わったあと、お母さん、これ。おたくの息子さんから預かった。読ませてくださいいね。「百億の民に」と読んだんです。途端にお母さん震える手でそれを握って、声を上げて「うわあー」と泣いたあと、抱きしめて、「○ちゃん、ありがとう」と叫びました。患者さんは、自分ももちろん辛いけれども、自分のお世話をしてくれるお母さんのことを思いながら、彼は僕に託したのです。あと一枚は「情けは人のためならず」という言葉が書いてありました。この意味は皆さんで考えてください。これは僕への激励なのです。

その他にも、哀しいけれど、とても胸が暖まるような出会いもあります。

のっけからこんな話で恐縮ですが、この前は二十二歳の肺癌の女性の最期を看取りました。

例えば二十一歳の若者。男の子。この子も肺癌の末期でした。この子は高校を出たあと三年間、一生懸命ボーナスを貯めて車を買いました。それもオフロードのちよっ

ターミナルケアと生死観

とでっかい車を買いたくて、ポータスを一円も使わずに彼はお金を貯めました。しかし、病気が発見され、闘病しました。残念ながら上手くいきませんでした。彼が車に乗れたのは新車が届いて五分でした。泣きながら。もう一回乗せようと思いましたがもう無理でした。

実は、僕らにとつてはとても困った症例でした。なぜかというところ、できるだけ患者さんの痛みや苦しみを取ろうということを医療は考えています。無理な治療はせずに。ところが彼は最後まで要求しました。痛みなんかどうでもいいから、とりあえず、1%の確率かもしれない。九九%ダメでも、何でもいいから癌を治す治療をしてくれ。ずっと要求します。その変わり一日中何度も何度も「痛いよ…痛いよ…痛いよ…」ずっと言います。夜になると、「痛いー」と叫ぶ日もありました。最後の二日間は「痛いよ、痛いよ、お母さん、助けてー」。僕ら病院の医療チームとしてはとつても辛い。もつと上手くやれなかったか、もつと彼に良い時間を作れなかったかと、僕らはとつても反省をしています。これについては、今も僕らは病院の中の勉強会で、何でこんなふうになってしまったんだろう、もつと良い時間を作れたかった。

でも僕らには彼は本音を言わなかったけれども、まだ若い新人の看護師さんに自分の思いを「絶対誰にも言ったらダメだよ」ということで伝えていました。亡くなられた後、反省会で勉強会をします。その若い看護師さんが勉強会で教えてくれました。彼はこう言ったそうです。「僕はもう、この治療で治らないことは知ってる。無理だということも分かっている。でも最後まで続けてね」と。「治らないと分かっているでどうして続けるの?」と言ったら、「だって、僕がもう止めてって言ったなら、お母さんが悲しむでしょう。お母さんががっかりするでしょう。だから僕は最後まで続けて欲しい。どれだけ痛いと言っても続けて。僕が今お母さんにできることはこれしかない。最後までできるだけ頑張ることなんだ」本当はそうじゃないんだよと伝えられなかった僕らの方が、もつともつと上手くやれなかったかと今でも後悔しています。ただ彼の中には、苦しい治療を治らないと分かっても要求していたのは、もう止めてと言えばお母さんががっかりするから。

患者さんというのは本当にいろんな思いをしています。今日はターミナルケア、今風に言えば終末期医療。本当に言うとはあまり使わない言葉です。アメリカではおそ

ターミナルケアと生死観

らくターミナルケアというより、「エンド・オブ・ライフ・ケア」ということの方が多くなっています。また意味が少し違うんですが、厚生労働省は「緩和ケア（パリアティブ・ケア）」という言葉を使ったりもします。これはどんな意味かと言うと、「パリウム」というラテン語から来てるそうで、マント、ねんねこみたいなやつ、赤ちゃんを包み込む。つまり、苦しみ悩む患者さんを、暖かい思いやり、優しさで包み込んで行こうというケア、そこから出た言葉なんです。僕はそのチームの変なお坊さん。そして今申し上げたような、患者さんたちと共に、毎日じゃないですけど、お坊さんをしてしながらですけれども、患者さんと共に過ごしている。そこから僕が何を学んだか。逆に言うとか皆さんに教えるというよりも、今も学び続けています。そういったことを少し順序立てて上手くお話できたらなあと思っています。

四苦八苦ということ

さて、ここは仏教、浄土真宗の大学ですから、皆さんは仏教の時間に聞いておられ

るかもしれませんが、改めて確認しておきましょう。

僕は「仏教は何のためにあるの？」と聞かれた時には、こう答えることにしています。四苦八苦から出発します。「どうして僕生まれてきたの」知らないうちに生まれて来て、いつの間にか人生が出発した。小児科の難病の患者さんがいます。「なんでもこんなふう生まれちゃったの」こんな辛い話もちろんあります。お父さんとお母さんを決めて生まれてきた人はいません。そういつた生まれの苦しみと言っているのかしら。それから年を取る苦しみ。これはまだ僕にもピンと来ない。でも少しは分かるような気がします。ただ自分の父とか母をみて、「ああ、年を取るってただ単に年を取ることが辛いんじゃないかと、いろんなことを考えるんだなあ」と思います。それから病気の苦しみは後でお話します。病気になつて様々なことを悩みます。それから、いつか人は命を終えていきます。僕は滋賀医科大学ということで、医学部の四年生に講義をしますが、その医学科の四年生に必ず言う言葉があります。どんなことかという、「病気を治す名医はいつばいい。ノーベル賞をもらうような医者さんもいつばいいけれども、人を死なないようにできたお医者さんはいないんだ

ターミナルケアと生死観

よ」という話をします。彼らにいつも講義の中で頼みます。「君たちは病気を治すための勉強をいっぱいしている。それはもちろん続けて欲しいし、患者さんや家族の期待に応えてほしいけれど、また一方でお医者さんという仕事は格好いいけれど、とても悲しい仕事で、「死亡診断書」を書く仕事でもあります。亡くなったということを確認する仕事です」と。そうするとやはり辛いものがある、もうあの人には自分としては治療としてはすることがないから、後は看護師さん任せにして、自分は病室に顔を出さない。僕、学生たちに言います。「患者さんの最期の日まで、一日二回病室に行くと約束しろ。そして必ず単位は出す」「何があるかと最期の日まで行って、聴診器を当てる。そして脈を取れ。そして患者さんに声をかけてくれ。周りにいるご家族に声をかけてください。お願いします」と言う。それだけはやる医者になって欲しい。ただし、それはとっても辛いことです。例えば、卒業した人で、もうすでにお医者さんになってる人ですが、お医者さんの学会で会ったりします。そうすると、時々見つけだしてくれて「長倉先生」と走ってきたやつがいます。「どうしたの」と言っ、ぱっと目が合ったら目が真っ赤になるんです。「先生、僕、〇〇県の〇〇

病院の小児科におります。小児科の難病をやってるんです。先生おっしゃったように、僕は一日二回病室に行くけれど、約束は守ってますよ。でも、辛いです。だって若いお父さん、お母さんが、僕の手を握って「子どもを助けてください」じいちゃんばあちゃんが「孫をなんとかしてくれ」と言われます。とつてもとつても辛くてたまりません。先生、たまに電話していいですか」と言うんで、お互いに携帯を交換して、あるいはメルアドを交換して、いつでも連絡してよと言いながら。お医者さんというのは、病気を治すという点では、例えばテレビでやってるチーム・バチスタみたいなすごい格好いいところもあるけれど、またその一方で人は必ず命を終えていくので、その時に「死亡診断書」を書く仕事でもあります。必ず人は命を終えてゆく。これがおそらくお釈迦様のおっしゃった「生老病死」という四つの課題です。これをお釈迦様がどうおっしゃったかというところ、仏教はどう考えたかというところ、誰も逃げることはできないよということが一つ。それから誰も代わることはできないよというところ、考へたくないけど。誰も代わってくれないよ。病気を代わってくれる人いないし、誰も逃げることはできない。そのことが仏教の出発点だと思うんです。代わってはくれない

ターミナルケアと生死観

い、四苦八苦はなくならないけれど、それでも尚かつ、生まれてきて良かった、生きてきて良かったと言えるような人生の歩き方、生き方はないだろうか。それがお釈迦様の求めた仏教だし、この光華女子大学の基本的な理念もその仏教の理念に基づいています。それを僕は病気の方々の中で、例えば僕の患者さんたちが、生きてきて良かった、生まれてきて良かったと、言えないかと考えています。若くて命を終えていく方の中から、「先生、やっぱり僕生まれてきて良かったよ」「私、生まれてきて良かった」という方にも出会います。そういった方々がどんなふうな考え方、あるいはどんなふうなケアを受けて実際に過ごされたか。

緩和ケアの定義

その前にもうちょっと我慢して聞いて欲しいことがあります。それは何かと言いますと、今度は少し医療の話です。今は仏教の話をしました。仏教徒とは四苦八苦を抱えているけれども、それでもなお、生まれてきて良かった、生きてきて良かったとい

うことを探す道だと言いました。それに対して医療の方。例えば、一九九〇年にこういう定義がありました。「緩和ケアの定義」というのがWHOで出されました。二〇〇二年に改定されたんですが、改定されたというのは少し具体的になっただけなんですけど、一九九〇年にね、病気になるってこんなことがあるよということ。まず病気になるったら、病氣のことだけが辛いんじゃないんでして、大きく分けて「四つの痛み」があると言います。その一つは何かというと、病氣ですから、当然「体」。僕は癌の患者さんの相手が多いので、癌という病氣はほっておけばすごく痛い病氣なので、痛みがある。あるいは吐き気がある。あるいは骨なんかに癌が広がっていくと、手足が動かないということも起こる。そういう体の症状も一つの苦しみです。もう一つあります。まず病氣になったらみんなイライラします。それから腹も立ちます。それからその反対に落ち込みます。ガクつと落ち込んでいきます。本人だけじゃなくて家族も落ち込みますが、そういう「心の痛み」。心理的な痛みと言います。それから、だいぶ重い病氣で入院して一番先に考えることは何だと思えますか。「お金」です。入院したらいくらかかるだろう。それから逆に、お父さん入院しちゃったら……。例えば、

ターミナルケアと生死観

先ほど僕が見せた色紙の人ですが、これ書いた人、五十歳でお子さんが二十一歳と十九歳です。大学生です二人とも。この若い二人が何を考えたかというところ、お父さんのことも心配だけど、ちゃんと学校行けるかな、仕送り大丈夫かな。だって、入ってお給料めちやくちや減るし、そして使うお金増えるし。ということでお金のこともすごく気になります。それから、仕事をしている人は仕事はどうなるんだろうということも考えます。それからまた割と多いんですけれど、後で具体例を話しますが、「今一番お辛いことは何ですか」と聞くと、三十代、四十代の人ほとんどが子どものことをおっしゃいます。家族のことをおっしゃいます。自分が死んだ後、家族がどうやって暮らしていくだろう、みたいなことをおっしゃいます。これを「社会的な痛み」と言います。また僕はこういうのも聞いたことがあります。「死にたい」「殺してくれ」はよく聞きます。それから十一歳の男の子とね、二十一歳もそうだった。二十代、三十代、四十代、五十代、六十代…、最高齢九十二歳。「先生、お願いだから、火葬場に行きたくない。死ぬのはいいけど焼かないでくれ」と泣きながら言った十一歳。それから九十二歳。歳関係ない。実は皆さんがお見舞いに行った時に、お友達

に、あるいは家族に、どんな励まし方ができるかということも今日は考えて欲しいんです。今から僕は一人の患者さんの話をします。

つとむさんのいん

実はテレビでも一緒に紹介された人ですから家族の許可も取っています。名前は田中つとむさんと言います。僕が出会ったのは十三年前の四月三日です。彼とのお付き合いは、六月二十日の〇時五三分まで続きました。つまり彼は〇時五三分に臨終を迎えました。この患者さんは病院の中で会ったんじゃないやありません。僕の住む鹿児島県は真ん中に桜島があつて、鹿児島市のある薩摩半島と、反対側に大隅半島というのがあります。その大隅半島のちようど真ん中ぐらいの畑の中の一軒家です。彼は大学病院の患者だったんですが、お医者さんからこう言われたんです。僕が会う三ヶ月前に。「あなたはおそらく春の桜を見ることはできないでしょう」と。それでどう過ごしますかと言ったら「家へ帰りたい」。家へ帰りたいというのも理由が二つある。一つは

ターミナルケアと生死観

やっぱり病院なんかにいるよりはお家の方がいいやという話もある。もつと具体的な理由はお家の方がお金がかからないということがある。そういうこともあって、お家へ帰りたいということで家に帰られました。家に帰って、少し覚悟もしておられました。覚悟もしていたけれど、精神的にどんどん、どんどん、落ち込んでいきました。気持ちが落ち込んでいきます。体の痛みも増していました。それで、大学病院から電話があつて、「長倉さん、こういう患者さんが大隅半島にいるんだけど、行ってくれないか」。医師に案内されて初めて会ったのが四月三日でした。鹿児島市からフェリーに乗って、それから車でまた二時間かかります。その途中で、お医者さんから彼の記録をずっと説明していただきました。聞いてみたらすごかった。一番最初三十四歳の時、北九州で手術しています。直腸癌と大腸癌でした。そして僕が会うまでに十六年経っています。何回手術したと思う？ 大小入れています。二十五回です。そして働ける時は一生懸命働いた。後で彼から聞いたんですが、最初の手術が三十四歳。その時の子どもさんが上が九歳の男の子、下が四歳の女の子。そして彼は入院する前の日に、一晩中一睡もせずに子供たちの枕元で二人の顔を見ていたそうです。ポロポロ泣きな

がら見たとおっしゃいました。そして病院に行つて病院の先生に、「お願いですから、無理な手術はしないでください。ひと月くらい経つたら働ける体にしてください。それだけが条件です。だって僕が働かなきゃうちの家族がダメになります。お願いだから働ける体にしてください」これが彼の最初の手術です。そしてそれから僕が会うまでの十六年間に二十五回の手術。働ける時は一生懸命働いていたようです。そして彼のベッドサイドに行つて、医師や看護師や家族、奥さんもいたんですが、彼が「みんな悪いけど、長倉さんと二人にして」。皆には部屋をはずしてもらいました。二人つきりになりました。そして彼はこう言いました。「先生、お坊さんつてさ、困った人を助けてくれるのが仕事でしょう」と言うわけです。「一休さんや、良寛さんだって困った人を助けてくれたでしょう」そんなに仏教に詳しい人じゃなかったの
で、親鸞聖人とは言わなかったけれど。「先生、僕を助けると思つてお願いがあります」「なんででしょう」。その時は目が真っ赤でした。「お願いですから、殺してください。お願いですから、死なせてください」僕は折々、こういう時の対応の仕方の話をします。落ち込んだ人にどう対応していくかということになります。皆さんだつ

ターミナルケアと生死観

たらどうする？ 普通でしたらこう言っちゃうかな。「そんな弱気になってどうするの」「そんなこと言わずに元気出して頑張んなきゃ」「もっと明るい方みて頑張んなきゃ」これが優しさだと勘違いしている人が多いような気がします。僕はそういうのは、安っぽい励ましと名付けています。確かに言いたくなっちゃう。そんなこと言わずに頑張つてと。「頑張つて」と言われてすごく嬉しい時もあるんですよ。嬉しい時もあるけど、例えばどうだろう。頑張りすぎるほど頑張ってる人に向かって「頑張つて」って残酷じゃないかしら。そんな気がします。僕は素直に言いますと「お願いですから殺してください。死なせてください」と言った時に「そんな辛いこと言わないで」とは言いませんでした。それまで病棟でこういう会話を経験していたので、こう答えました。「そうですね。殺してくれ、死なせてくれ。今、辛いんですね」実はこういうのをモノの本では何て書いてあるかと言うと、「傾聴」と。耳を傾けて聞く。つまり相手の言うことに耳を傾けて聞く。しかも、相手の言うことがとっても辛いことでも、受け入れて行く。ちよつと漢字でしゃべると、「受容的に傾聴する」という訓練を僕たちはしています。「殺してくれ、死なせてくれ。と言わなきゃいけないく

らい、今、辛いんですね」と言ったら彼はポロポロ：と泣いて、彼は「先生は、頑張れと言わないんですね。僕がこんなことを言うと、僕の周りに来る人はみんな、頑張れ、頑張れ、と言ってしまう。先生おかしいですよ。僕、だって二十五回も手術を受けて、今だって、本当に自分でも頑張っているつもりなんだ。こんだけ頑張っているのに、もしこれ以上頑張れと言うなら、何をどうどう頑張ったら死なずに済むか、教えてくれ！」これ患者さんから何度も何度も聞いた言葉です。頑張れ、頑張れという言葉、とても良い言葉に聞こえるけれども、何をどのように頑張れと言わないと、相手からみたら「お前、頑張り方が足りないぞ」と聞こえてします。だから僕は「だって、僕、二十五回も手術受けてないです。そして体が悪いのに一生懸命働いたりはしていません。そういう僕が、つとむさんに向かって、頑張れなんて、とてもあなたには言えません。あなたは頑張りすぎるほど頑張ってきたんですね」と言ったら、ポロポロ：と。「今までオレのそばに来るやつは、ただ、頑張れという人ばかりだった。僕の気持ちなんて誰も分かってくれなかった。先生は頑張れと言わないんですね」実はこの一つで彼には気に入られたみたいですが、その後僕はこのように話を

ターミナルケアと生死観

進めました。「もし良かったら、どうしてそう思ったのか。死にたい、殺してくれとまで言うようになったのか。もう少し、お話いただけますか」これね、「促進」、促す、進めるといふふうに僕は言います。相手の言うことをドーンと受け入れて聞いて、そしてドーンと受け入れた後、もうちょっとお話を聞かせて下さい。お友達が悩んだ時に、みんなすぐ何か答えを言いたくなってしまいます。「あんた、そんなふうを考えてちゃダメだよ。こう考えなきゃ」と言われても意外と落ち着かない。それに對して、落ち込んでる人に向かつて、「あんた、そうじゃなくてこう考えなきゃ」そんな口でね、こう考えなきゃダメだよって言われるくらいで「はい、気持ちが変わりました」って言うんだったら大した悩みじゃありません。本当に辛い時には「気持ち切り替えて」とか言われたって、なかなか切り替えられないのが僕らの心です。僕は病棟で「頑張れ」という言葉を使ったことはほとんどないですね。「もう、少しお話いただけませんか」必ずこの言葉がついています。これはどんな患者さんにもそうです。どんな悩みを聞く時でもそうです。そして彼はこう話しました。「先生、今日でうちの妻が四日寝てないと思います。私が夜中に痛みでうめくんでしょうか。私が

目を覚ますと私の体を妻がさすっています。ふっと気がつくと体をさすってくれています。このままだと妻が倒れます。私もう十六年前からここに人工肛門ぶら下げて生きてきた人間ですよ。だいぶ寝込んだり、別れる切れるのケンカもいっぱいしました。離婚しようと思った日もありました。でもそんな私をずっと支えてくれました」今日は大人だけだからいいよね。彼は男の人ですから、僕も男だったので、本音でしゃべってくれました。何て言ったかという、「夫婦としてのこともろくにやりません」。意味分かるよね。「そんなこともできなかった男です」と。彼は僕の前で泣きました。「それでも妻は付き合ってくれました。もう十分です。私が死んだあと、妻が倒れるなんて考えたくもありません。もういい加減、妻を楽にしてあげたい。子供たちもそうです。幼い二人は私が病気の間にもう二十歳も過ぎました。本当は知っています。二人とも高校が終わったら、皆さんみたいに大学に行きたかったって知っています。でも上の息子は大学に行くことなんか一言も言いませんでした。家の近くで仕事を見つけてくれました。下の娘は就職が決まって高校を出たあと、鹿児島から大阪に行きました。でもひと月たって「お父さん、私クビになった」と言って帰って来まし

ターミナルケアと生死観

た。私は心配してその会社の人事部長に電話をしました。そしたら人事部長が「ああ、〇〇さんのお父さんですか。ご病気だそうですね。良い娘さんをお持ちですね。やはりあなたとお母さんのことが心配で、こっちにいたらどうも仕事の手につかない。ちゃんと私のところに挨拶に来て、辞めさせてくださいって言って来たんですよ。どうか娘さんの志に甘えてください。もし、娘さんがもう一回うちの会社に勤める気になったら、私の名刺に裏書きしてあります。ハンコも押してあります。これを持ってうちの会社を尋ねてください。一年先でも二年先でも必ず雇いますから」。でも、この娘さんは、お父さんとお母さんのために帰ってきたなんて一言も言わずに、「私はあの会社、見習いの間にクビになった」と言って帰ってきました。「先生、その二人がああやって働いてくれます。どこに五十歳の親父で娘と息子が稼いできたお金で家で生活している、そんなバカな話がありますか。もういい加減、自分で稼いでお金くらい自分で使わせてやりたいと思います。だからお願いですから殺してください。夕べも自分の首に紐をかけて締めようとしたけど、力が弱ってできません。先生、お願いします。手伝ってください」。そう言って枕の下から紙が出てきて、「これ

先生に預けます」と言つて、何が書いてあつたかというのと、「自分がどれほど死にたがつていたか」ということを書いてハンコを押してくれてあります。後には笑い話ですけれど、「先生、これ持つてたら殺人罪じゃなくて、執行猶予が付くと思うから」つていうふうと言つて僕に渡してくれました。それほど実は悲しい日を過ごしていたようです。「そんなこと言わないで」じゃなくて、「あなたは自分の命より何より自分のご家族が大事だったんですね」と言つたら「当たり前でしょう！」と。「先生、うちの息子と娘、給料日には給料袋のままうちの妻に渡して、そして私のベッドに来て、「お父さん、今日、給料日だからすき焼きでも食べようか」、どこに本当に五十歳の親父が息子と娘の世話になつて生きているやついないでしょう。もう十分です。本当に私は素晴らしい家族に恵まれました」。これが彼の「死にたい。殺してくれ」の中身です。そして言えるでしょう。自分の命より何より家族が大事だったんですねと云えるでしょう。そして彼は「当たり前です」と。でもこうやつて話していると変化が起きるんです、表情に。だんだん顔色が良くなつてくるんです。落ち込んだ顔色から。そして私は彼にもう一つ言いました。初めて会つた僕にそこまでのお話をなさつ

ターミナルケアと生死観

て、その自分の気持ちを家族に伝えたんですか、と。「言えないのは卑怯でしょ。他人の僕にスツと話せて、自分の大事な家族に自分の思いを伝えないまま死ぬんですか」って言いました。皆が帰ってくるまで待って、六時を過ぎて、息子さんと娘さん二人とも泥んこになって帰ってきました。「ただいま」と言って帰ってきました。ベッドの周りに集めました。「お父さんが、私に殺してくれ、死なせてくれとおっしゃった」と言ったら奥さんがすごい。普通の奥さんだったらこう言います。「あなたそんなこと言わないで」。これは安っぽいドラマ。この奥さんは何て答えたかと言うと、「そうでしょうね。きつとそうでしょうね。もし反対に私が病気であなたに看病してもらっていたら私きつと同じこと言う。私もきつと死にたいと言う。あなたはいつも私たちのことを第一に考えてくれたから。先生に何を頼んでもいいですよ。私はこんな病気のなにそれでも一生懸命生きているあなたが大好きでした。それだけなんです。だからあなたと今日まで一緒に生きてきたんです」奥さんがちよつと泣きながら言いました。息子が横から、彼は高校野球のそんな強くはないけど、三回戦くらいまではピッチャーで投げた人間で体はがっしりしています。そんな彼が「お父さ

ん、オレ、お父さん尊敬してるよ。オレ、お父さんみたいに根性ないもん。お父さんに勝ちたいと思うけど、オレ、絶対に勝てないよ。どこの誰があんな手術しながら一生懸命働くんだよ。オレ、お父さんに負けられないように頑張ろうというも思ってるんだよ。今でも。お父さんにはそれでも勝てないや」娘さんが横から泣いてました。「私もそう、お父さんのこと尊敬している」と言いながら泣いてました。お父さんがこの時ベッドから僕の顔を見ながら、「先生、うちの家族はいつも私の心と一緒にいられた」と言いました。実は人にとって一番嬉しいことはそういうことなのです。あの人は私の心といつも一緒にいてくれる。何か特別なことを言ってくれるのではなくて、いつも自分の気持ちと同じところに心を置いてくれるという感じを、お互いに皆さん持っているだろうか。あるいはそんなお友達が一人でもいるだろうか。自分の心と一緒にいてくれた。彼はそう言いました。

その後、息子が「お父さん、お父さんの気持ち分かったよ。長倉先生に何を頼んでもいいよ。オレたち家族でお父さんの言うことに文句なんて言うもんか」。本当は一番言いたかったはず。「死ぬなんて言うな」と。「今度はオレの話を聞いてくれ

ターミナルケアと生死観

よ」お父さん少し余裕が出てきているので、何でもいいから言ってみろ、と言いました。そしたら彼は「お父さん、オレが仕事から帰ってくる時、いつも「ただいまー」と叫ぶだろう。何であんなにでっかい声出すか分かってる？ あれ、奥で寝ているお父さんに聞こえるように言ってるんだよ。もしオレがいくらでっかい声を出しても奥にお父さんがいなくなったら、オレがどれだけ辛いか、悲しいか分かってるか。一円も稼がなくていいよ。返事もしなくていいよ。もう少しそこにいてくれよ。一緒にいられるのあと何日もないんだぞ！。頼むよ、もうちょっとそこにいてくれよ」。お父さん、それから先はもうボロボロ、ボロボロ泣いて、僕におっしゃった言葉がこれです。「先生、私、まだ生きてて良いんですね」「そうみたいです。もう少し生きてなきゃいけないみたい」と言いましたら彼が「ありがとうございました」。これが彼との十三年前の四月三日の最初の出会いです。それから一週間後にまた約束で訪問しました。そしたら「私にできることはありませんか」と彼が言い出しました。僕はお願いしました。今まで出会った人にメッセージを送ったらどうですかと。今みたいに良い録音機なかったのでテープレコーダーでしたが、テープレコーダーで、「〇〇さ

ん、あなたの家に行ったの十何年前だよ。あの時、奥さんが揚げ出し豆腐作ってくれたよね。美味しかったなあ。今でも覚えていますよ。僕が死んだあと、僕の家族の相談相手にこれからもなってくださいね。お願いします」それから今まで出会った人、親戚やお友達、職場の同僚やみんなにいっぱいメッセージを入れてくれた、そのテープを僕もいただきました。

そして彼が亡くなる日が来ました。連絡を受けたのは夕方四時頃。血圧が六〇からだんだん下がりとつあると主治医からの電話でしたので、「今から出ます」と。でも彼の家に着いたのは夜の七時か八時頃です。車を、畑の中の一本道を走っていったら息子さん立ってるんです。僕がライトを当てたら道路に立っています。車を止めたら、「先生、親父まだ生きてるよ！」と。「そう！」と言いながら飛び込んでいきました。そこにもう医師や看護師やいっぱい来てたけど、「つとむさん、遅くなつたね」と言ったら、横から主治医が「先生、二時間前から瞳孔開いているんです。おそらく聞こえてません」。それでも僕はずっと語り続けてました。三十秒か一分に一回、肝臓も悪かったので痙攣が起こるんです。僕はその震える手を握って語りかけてまし

ターミナルケアと生死観

た。そしたらいつのまにか彼が僕の指を撫でたような気がしました。「え？」と思ひまして、医者に「先生、撫でたような気がする。もう一回、瞳孔見てくれない？」と言ったら、「いや、もう何度も確認しています」「いや、もう一回見て」。すると主治医の先生が見たら「先生、反応あります！ おそらく聞こえていらつしやいます」と。奥さん呼びました。「あなた、ご苦勞様。本当にありがとうございます」。息子が「お父さん、お母さんと妹、オレも一生懸命やるから、心配しないで」と言つて、娘さんが「お父さん」っと泣きながら来ました。それで僕、横から「おいおい、お父さんが自分が死ぬ時に、娘に泣かれたらたまらんと言つてたぞ」と声をかけましたら、「そうだつた先生。お父さん、もう私泣かないよ。本当にありがとう。お母さんとお兄ちゃんの言うこと、今まで生意気だつたけど聞くから」そしたらお父さん、反応はもちろんないんだけど、涙が一滴ぼろつと落ちて、それからしばらくして彼は臨終を迎えました。そして、僕の人生で初めてです。医者が臨終を迎えたと告げた時に、そこにいらつしやる方々から拍手が起こつたんです。人が死んだ時に拍手があつたのは初めて。見渡したらみんな泣いてるんです。泣いてるんですけど、みんな拍手なんです。

おそらく一生懸命生きた人への労いの拍手。人の命の終わり方ってそういうことがある。っていいんだと僕その時に思いました。拍手が起こるような人生ってあるんだなど。格好良くないよ。三十四から病気で、働ける時、お金の苦勞もしてるし、家族も一生懸命働いてるし、世間で有名人でもないし、何の格好いいこともない。大隅半島の畑の中の一軒家。そこでただ五十歳の人が命を終えただけです。でも、その命の何てステキなこと。何て一生懸命生きたこと。僕はそういうような命の見方があっていいというような気がするんです。その後、みんなで体を綺麗にして久しぶりに彼をベッドから降ろして、遺体を奥さんやらみんなと一緒に仏間に運んで、「先生、お経読んでくれるか」。僕、預かってたんです、彼、自分が死んだ後、これを家族についていう手紙を。家族には内緒でね。お礼の気持ちとかいっぱい書いてあったけど、最後にこんなこと書いてあった。「ありがとう」という字がたった五文字であることが悲しい。僕の気持ちにはたった五文字では表せない。もつともつといっぱいの言葉で表したいけど、ふさわしい言葉は「ありがとう」しかない」。それを僕は皆さんの前で読ませていただいて、奥さんとご家族にお渡ししました。さきほど、僕はWHOの話をしたの

ターミナルケアと生死観

を覚えていらつしやるでしょうか。病気ですから体の痛みもあります。今はもちろん癌の痛みは普通の痛み止めやさらにモルヒネという麻薬を使つて、これも中毒の起こらないちゃんとした使い方をすれば、中毒はおこりません。だいが痛みがとれるような時代がきました。しかし、心の痛みがあります。それから家族のことを思つたり、お金のことをも悩んだりしています。この患者さんも「先生、何だったんだろう。私の人生何だったんだろう」こういうことは何度もおつしやいました。「オレは何のために生きてきたんだ」と、こんなことも何度もおつしやいました。でも、やっぱりこの患者さんも「オレ、生まれてきて良かった」という言葉を僕に言つてくださった。

それから数年経つて、とても嬉しいニュースがありました。息子さんは工業高校の出身です。工業高校の出身だったけど、お父さんが亡くなったのは確か二十六か二十七の時でしたが、彼はそれから四年後に、三十歳から改めて、コンビニでバイトをしながらだけど、夜間の看護学校に通いました。そして三十五歳で正看護師になりました。ずっとバイトをしながら。お祝いの宴会を開きました。彼のあいさつです。「ちよつと出発は遅いけど、うちの親父が僕が看護師になったなんて今一番驚いてま

す」。父親を支えた男性の看護師さん、女性の看護師さんたち、そんなふうには僕もなりたいと考えたのです。でも大変だったと思います。工業高校終わって十二年。受験の時も全然やっけないようなことをいっぱい勉強しなきゃいけなかった。そして今彼はどこで働いているかというと、京都の病院におります。これを君たちに伝えたいのは、彼もとても素敵な家族だということも伝えたいけれど、三十歳から今までの人生から切り替えて、再出発したのです。

私の出発

実は僕も偉そうな顔でお話していますが、今大学で教えてることは、三十五歳から勉強したことです。若い時に勉強したことではありません。その時は全く別のことをやっていたように思います。もちろん役に立ってないとは言わないけれど。三十五歳で鹿児島に帰って、家でお坊さんをやりながら、お寺って何だろうな。人が死んだ時にお金もらう仕事って何かヤダなと思いました。でも改めて仏教を少し勉強したら、

ターミナルケアと生死観

「あ、昔のお寺って生きている人の相手をいっぱいしてるじゃないか」ということに気が付きました。それから少しずつ少しずつ勉強していくと、ヨーロッパやアメリカでは、宗教家が病院で仕事をしてるじゃないかということを知りました。日本で一番最初にできたホスピスが浜松にあります。原義雄先生という先生に教えていただきました。その先生のお話を聞きました。それから大阪にあります淀川キリスト教病院、東京の桜町病院。さらに今僕が一番勉強させていただいているのは、東札幌病院です。そこでは、初めは変なお坊さんだとずっと思われてました。何で坊さんが病院に来るの？と。今はその感じは僕にはなくなりました。病院にいるのが当たり前のお坊さんになりました。患者さんには四つの大きな痛みがあると仰いました。体の痛みがあつて、心の痛みがあつて、お金のことや社会的な痛みがあつて、それから人生って何だったんだろうという痛みがあります。そのためには一人の人間でケアはできません。僕がいる国立鹿兒島医療センターでは、ターミナルケアチームとは言わずに、緩和ケアチームと言います。これは厚生労働省の指定病院なので緩和ケアチームが置かれています。医者が一人です。それから癌の専門看護の認定看護師が二名で

す。それから薬剤師さん、栄養士さん、理学療法士さん、それから臨床心理士さん、そして地域連携室のソーシャルワーカーさん、それからあと僕。この九人が医療チームです。そして病棟からの依頼がある患者さんのケアをします。体の痛みは、これはお坊さんではどうしようもありません。いくら坊さんが何とかやろうと思つたって体の痛みはやっぱりお医者さん、看護師さんの仕事。それから今度、ちよつと機能が悪くなつたら理学療法士さんの仕事。さらにリハビリの人たちね。それから例えば、心の痛み。これは病院で言うとき精神科の先生ともう一つは臨床心理士という人たちの仕事。カウンセラーさんが入る場合もあります。それからさらに、社会的な痛みというのはソーシャルワーカー。医療ソーシャルワーカー、メディカルソーシャルワーカーと英語では言いますがこういう人たちがやります。そして最後の痛み、これはちよつと日本語にしにくいので英語で言いますが、スピリチュアルな痛みと言います。「私の人生は何だったの」「火葬場に行きたくない」人間ならみんなが抱えている痛みがパーツと出てきます。そういう時に、さあ一体どんなふうに考えていけばいいんだろうという時に、チームでアプローチします。患者さんの痛みを一人で解決できるなん

ターミナルケアと生死観

て思っていません。これをチームケアとしてやっている。そして四つの大きな抱えている痛みについてみんなで検討しながら患者さんを支えている、というのが僕らの仕事なんです。もう一人の例を紹介します。

温もりと笑顔

患者さんは三十八歳です。子供さんが中学三年生と、小学校二年生と、保育園に行っている五歳の男の子がいます。ご主人が三十九歳です。僕がこの方と会ったのはあの年の三月七日。そして、五月の二十日までお付き合いしました。この患者さんが僕と最初に会った日はこんなふうです。まだバジヤマで点滴の瓶を押して歩きました。スキルスの胃癌とって、この患者さんは割と早い時に見つかったんですが、残念ながら癌にもすぐ足の速い癌と遅い病気とあるんです。人間にも足の速い人もおれば、僕みたいに足の遅い人もいるし、病気にもそういうタイプがあって、とても速いタイプです。治すよりも広がる速度が速いタイプの癌でした。ある年手術してます。

そして手術したけれど、一年後に再発するだろうと言われて一年後に再発しました。それから化学療法とかがやりました。しかし残念ながらある年の二月半ばかりからだいぶきつくなってきました。そしてだいぶ精神的な落ち込みが出ました。お医者さんが四人くらいいる病院です。終末期医療には慣れていない病院でした。最初に行った時に、どんな小さな病院でも大きな病院でも、相談を受ける時には、泣いてもわめいてもいいお部屋というのを作ってもらうことにしています。悲しい話をするから、辛いから、泣きわめきたい時があります。でも人がウロウロしてるところで人の相談なんてできません。最悪の場合、院長先生の部屋を貸してとか言って部屋を貸してもらう時もあります。そんなふうにしてやっています。彼女と向かい合った時に、僕は自己紹介しました。その後、「今、一番辛いことは何ですか」と聞きます。「今、辛いことは何ですか」と聞いたことはありません。「今、一番辛いことは何」とか、「今、一番気がかりなことは何」。一番という言葉が必ず入っています。何か悩んでいる人って、悩みが一つ起こると一つじゃないんです。いっぱい悩むんです。いっぱい悩むんですから、その中でも今一番というふうには、辛いことの優先順位を聞いてい

ターミナルケアと生死観

きます。ですから、「今、一番辛いことは何ですか」とこの方に言ったらこんな状態でした。「一番辛いことは……」までおっしゃいました。ところがその後、「ワー」と泣き出して、「家族！」って言って号泣しました。家族と言って泣きながらその後、「せめて、せめて、一番下の子、保育園の年中です。五つの男の子。来年の入学式で手を引いてやりたい」と言って泣きました。僕こういう時に絶対に言わない言葉がいくつもあって、まず一つは「そんなに泣かないで」と言ったことはいけません。泣きたい時は思いっきり泣けるのは心にとって健康なのです。笑いたい時に笑ったり。ですから、心にとつて何が健康かという時に、泣きたい時に思いっきり泣けるって幸せだし、やまない雨と一緒に、止まらない涙はありますから、一緒に泣く間はお付き合ってください。付き合ってください、かならず泣きやむから。何分かかれば。そして、せめて一番下の子の入学式で手を引いてやりたいとまた一時泣きました。僕は絶対にこれは言っちゃならない言葉と心に決めているのはこういう言葉です。「あ、子どもさんのね、一年先の入学式ね。そのつもりで病氣と闘いながら頑張ろうね」絶対に言いませんね、僕は。それを言ったらウソになっちゃうから。この方

の症状はその時点であと二ヶ月か三ヶ月だったんです。その時に来年の入学式に手を引こうね、なんて言ったたらその時は喜ばれます。「そうね、私頑張ります」って言うよ。でもそれからひと月経ったら、容態が落ちていきます。「あの時、そのつもりでって言ったけど、知ってたんでしょ。ウソつき。私が悪いこと知ってて……」。皆さんに聞きたいけどね、命に関わるウソを言われた人をもう一回信用する？ 絶対信用しません。「いや、そのつもりじゃなくて、あなたを励ますつもりで言ったの」弁解です。辛いことだけでも、僕らは真実、本当のことを共有するということなしに、本当の医療はなされないと考えています。そして僕は「そうですね。母親だから来年の入学式で手を引いてやりたい。他の兄弟の手を引いたように。そうしたい気持ちはよく分かるけど、それができそうもないから辛いんですよね」。僕、残酷ですか。「あなたはできませんよ」と言ったんです。そしてたまたま彼女は何て言ったかというのと、「ありがとう、ありがとう」って繰り返してくれました。「私の周りに来る人は皆、そんなこと考えるな、考えるなと言う人ばっか。私の言うことをまともに聞いてくれたのは先生だけ。本当に黙って受け入れてくれたのは先生だけ」「先生、もうね私、

ターミナルケアと生死観

今でも母親失格。子どものこと何にもしてやれないし、妻としても失格。それから嫁としても失格なの。「そんなこと気にしなくていいよ」と言う人が多いようですが、僕は「そうだね、子供さんと一緒にご飯食べたりに、子供さんと一緒にドライブに行ったり、学校のPTA行ったり、あるいは、家族で旅行に行ったり…、もう何ヶ月もそんなこと何もしてないよね」と言ったら、「先生、ありがとう。そうなの。みんな私のところに来る人はそんなこと考えるな、考えるなって言うけど、考えるなって言われて考えずに済むなんてことないでしょ。夜はずっとそのことばかり思ってるんだもの」。その後、彼女は「誰かに私の気持ちを分かかってほしかった」。こういうお付き合いというのもあるんです。「元気だして」とか「頑張って」とかは言わない。これを英語で言わせていただくこんな感じ。「Not doing but being」。これは実はイギリスのホスピスに掲げてあるとても有名な言葉なんですが、「Not doing but being」。「Not but」の構文って言って。「私はあなたに何か望むことをしてさしあげることはできないけれど、私はあなたを一人にはしませんよ。私はあなたの望むことをしてあげたり、あなたを助けたりはできないかもしれない。でもあなたを一人にはしません

ん。私でよかったらあなたのそばにいますよ」。実はそんな気持ちでそばにいくるとすごい心が楽になるんです。どうも世間の方は悩める人に会うと、立派な方はみな、何か問題解決策を出してあげなきゃという気持ちになるみたい。僕は問題解決者ではなくて、その方の伴走者、マラソンでいえば横を走る人。一緒に並んで走っていく人、そういう関係があったらいいなあといつも思ってるんですけどね。この患者さんにも「そうだね。子どもさんのこと何もできないね」というふうに言うと、「先生、ありがとう、ありがとう」とおっしゃるのです。その後、僕、看護師さんにすぐノート六冊買いにいったもらいました。これなんのためだと思いますか。子供さんの宛の日記、交換日記です。お父さんにそれを交換してもらおうようにしました。しばらくして彼女は気が付きました。「先生、この日記、私が死んでも残るんですよ」というから、「バレたか」と言いました。「あなたのお子さんたちは、この日記を開けば、あなたがいなくなってもお母さんに会えるから。そのつもりで書いていただけますか」。亡くなる三日くらい前まで、最後はミミズが這うような字んだけど書いてくれました。亡くなられてからひと月くらい経って、うちにその家族が遊びに来てくれ

ターミナルケアと生死観

ました。元気な顔を見せに来てくれたんです。そしたら小学校二年生の娘さんが、「先生、お母さんの書いた日記、見せてあげようか」って。「見ていいの?」「うん、私の一番好きなページ」この子が見せてくれました。何て書いてあったかというのと、「お母さんは今日は吐き気が強くてもう書けません。でもいつも書いてる時間の分だけ、○○ちゃんのことを想っています」と書いてありました。「先生、今でも私のお母さん、私のこと想ってくれてるよね」「ああ、きつとそうだね」。こんなふうに子どもたちは今でもこの日記を開いています。そして、患者さん自身も母親としての役目を果たしました。次に夫のことです。「先生、私は死んだ後のことを夫と話しておきたい。だけれど、私の夫は優しい人で、私が死んだ後と何て言うのと、「そんなこと言わない! 諦めるな!」。先生、うちの夫と話してくれますか」というので、「ご主人、明日残業が終わるの何時?」と言ったら「夜の八時頃」「分かった。じゃ、病院で八時にお会いしましょう」。ご主人はこう言いました。「先生、私は奇跡を信じています。でも本当言うと、何かがあった時に、妻が子どもにどうして欲しいとか、そういう話もしたいけれど、でもそんなことを話したら妻がショックを受けそうで」「奥さ

人も同じ気持ちですよ。だったら明日の晩、病院に泊まりませんか。二人部屋空けま
すから」と言つて病院にお願いして、一晩だけ二人部屋を空けてもらつてご主人と二
人泊まっていたきました。僕は夜病室を出る時に、二人をからかいました。「今夜
は深夜勤務の看護師さんも絶対にドアを開けません。夫婦ですから、どうぞ、ご自由
に。ホテルの部屋と思つてください」と笑つたら、向こうも笑つてました。次の日の
朝七時半頃電話が来ました。「先生、ベッドは一つで良かったですよ」とおっしゃい
ました。で、僕が「ごちそうさま」と言つたら、「朝まで二人で抱き合つて泣きまし
た」つて。何で私たちだけこんなに辛いのか？ 次の日曜日、子供たちが全員揃つて病
院に来ました。お父さんとお母さんの様子見て、「お父さんとお母さん、気持ち悪
い。新婚さんみたい」。つまり、一番辛いことをお話できた夫婦です。もう隠し事い
りません。お互いに本当に率直に目を見つめ合いながら語る夫婦です。これでご主人
がすごく力を発揮するようになりました。その後、今度は子どもです。

まず、小学校二年生の女の子です。この子のことで一番記憶に残るのは、亡くなる
二、三週間前ですが、廊下で僕を捕まえて「大人の人がいつも言うでしょ。人間生き

ターミナルケアと生死観

ているうちが花だ。死んだら終わりだって。「うちのお母さん死んだら終わりなの？ 死んだら腐った花になって枯れて焼かれて捨てられるの？」。この子が言うんです。「ね、先生のお話聞いてくれますか」と言いました。「うん」「あのね、君のお母さんね、かぐや姫さんみたいなんだよ。もうすぐお月様に帰る日が近づいているんだよ。かぐや姫さん、お月様に帰る時何て言うかな」。絵本はちゃんと準備してあります。「おじいちゃん、おばあちゃん、今まで育ててくれてありがとう。私は月の世界へ帰ります。今度は月の世界から見守ってるから、おじいちゃん、おばあちゃん、元気で長生きしてくださいね」。かぐや姫のお話って最後こうでしょう。後で文学をやっている人に聞いたんですが、若くして死んでいく人の話として平安時代は受け取られていると言われました。若くして亡くなる人たちのお話だ、そういう理解を少なくとも紫式部はしていたと。話を終えると、ベッドに走って行きました。病室に「お母さん」って行きました。「お母さん、かぐや姫さんなの？」って聞きました。それからお母さんベッドで、もう亡くなる十日くらい前で、癌だからこんなにも痩せてるんだけど、ほっぺに手をあてて「そんなに美人じゃないけどね」とおっしゃいました。

その後、「お母さんね、お月様に帰るまでにはもうあとちょっと間があるから、○○ちゃん、今のうちにいっぱいお話しようね」。実は残された時間を大切に生きるとはこういうことです。そして彼女は僕の方見て「先生、今日病院に泊まっていた？」って言うんで「うん。お母さんと今日寝たら？」この子がお母さんと寝た最後の夜です。お母さんの胸に抱かれた最後の夜がこの日でした。亡くなるまで一生懸命看病もしてくれました。亡くなってしばらくして遊びに来たって言ったでしょ。その時に僕ちよっと困ったことがありました。「うちのお母さん、かぐや姫さんみたいにお月様に帰ったって言ったでしょ。うちに来た坊さん、極楽に行っちゃったよ」と言うんです。そして、隣のおじちゃんや天国に行っちゃったって言ったよ。それからいろいろ聞いてたら電報が何かで、草むらに行っちゃったって言ったのがあったよ。あの草葉の陰でっていうやつ。そして隣のお姉ちゃんはお母さんはお星様になったってゆったって。先生、うちのお母さん、どうなったのさって言うんです。「うーん、ごめん、お坊さん、まいった」って言ったらこの子が、「先生、大丈夫」って自分の胸を押さえます。「大丈夫。お母さん、ここにいるもん」僕が一番伝えなかったことです。僕は浄

ターミナルケアと生死観

土真宗の僧侶ですので、手を合わせてお念仏を唱えます。お念仏を唱える時には、やはり私の合わす手の中に、唱えるお念仏の中に生きていてくれると思っております。

それから中学三年生の娘がいます。でもみんなちよつと不思議だと思わない？ 小学校二年と中学校三年じゃちよつと年が離れてるでしょう。このご夫婦はバツイチ再婚です。中三の子はお母さんの連れ子です。そしたらお母さんが死んだらこの子がどれだけ辛いかわかります。お父さんとは血は繋がってません。おじいちゃん、おばあちゃんとも血が繋がってません。下の二人の子だけお母さんが一緒。ちよつと立場辛いです。でもこの子は何も愚痴を言わずにオムツを替えたりしてましたが、亡くなる十日くらい前にお母さんに言いました。「お母さん、私のことなんかどうでもいいんでしょ」と。お母さんはもうフラフラする体でやつと体を起こして、ほつぺをなでるように叩きました。それで「うわあー」と泣いてました。娘も泣いてました。この日は二人何も口をきかなかったです。でも次の日になって、「お母さん、昨日ごめん。私がバカなこと言つて。でも分かったよ。お母さんあんなに辛いのに、身体を起こして。私もう大丈夫だから。将来、お母さんみたいな人になるから」って言ってくれま

した。お母さんと二人で抱き合って泣いてました。僕は臨終の時にはこの方のそばにはいませんでした。でも臨終五分後に携帯に電話が夫から入ってきて「先生、五分前に臨終でした」と。「ご苦労様でした。本当に一生懸命看病されましたし、一生懸命生き抜かれましたね」と言った後、「またゆっくりお会いします」と言って切りま
す。僕が電話を切った後、ドラマがあったようです。何があったかと言うと、この中学三年生の子が、小学校二年の時にお父さんとお母さんは再婚してます。それでお父さんに向かつて何て言ったかというところ、お母さんが死んだばっかの枕元で、「お父さん、今までお母さんを本当に大切にしてくれてありがとう」と言ったそうです。このお父さんは実の子じゃないから、それまでこの子には気を遣っていませんでした。本当に大事にしてたんだよ。再婚の時はお母さんと二人で僕のところにお嫁に来るんだよって言うってくれるようなお父さんで、本当に上手くいってるんです。でもこの子が「お父さん、私が小学校二年の時だったよね。お母さんがお父さんのところに来たのは。本当に今までお母さんを大切にしてくれてありがとう」とってこの子が両手について言ったそうです。そしたらお父さん夢中になって、中学校になって初めてだったそうです

ターミナルケアと生死観

けど、胸にこの子をギュッと抱いて「お前はオレの子だ！」って叫んだんです。そしてじいちゃんばあちゃんも「この子だぞ、オレたちの孫なんだぞ」と言ってくれました。人が死ぬことは辛いけど、とつても素敵なおドラマが生まれるんですよ。一生懸命生きてると。

亡くなる四日前か、ちよつと前に、この患者さんがもうだいぶ意識ももうろうとしてきました。ベッドで「長倉先生」と呼んでくれたそうで、ご主人が僕を迎えにきました。僕はベッドサイドに走りました。そして「長倉ですよ」と手を握りました。彼女は薄目を開けました。何て言ったかというのと、「先生、お世話になりました。少し先に行って待っています。先生も後から来てくれますよね」と言うんで「うん、必ず」。ベッドサイドに行く時の僕の心構えです。「あなた往く人、私残る人」という気持ちで病室のドアを開けたことはありません。「あなた往く人、私少し遅れて往く人」。僕、坊さんですので、共に浄土に歩む人と思っています。この人もうすぐ死ぬ人、僕こつちに残る人。これだと可哀想にといいふうにして相手を見てしまいます。でも僕だつて必ず往くんだもん。だから少し遅れて往く人、いつもそんな思いでドア

を開けると笑顔で入れます。そして、この患者さんのところに行つて手を握つたら、「先生、少し先に行つて待っています。先生も後から来てくれますよね」というので、「うん、必ず」と言つたら「先生、慌てなくていいですよ」と言つて。そして僕らはいつも死んだ後の約束をしています。この患者さんとは「先生、お浄土の門を入つて左側の白いベンチで私待ってるから」「分かった。左側の白いベンチね。そこで待ってるのね」とこんな約束をしていますし、あるおじいさんは「先生、後から来るんだから一本さげて来いよ」と言つた人もいます。「一杯向こうでやろうぜ。ただし瓶は燃えないから紙パックにしろよ」と、そこまで気を遣つてくれますが、そんなことも平気で話しています。その後、「先生、最初の日の約束を覚えてますか」と言うから、「覚えてます」「私ね、なれましたよ。日本一、世界一幸せな癌患者になれましたよ」と言つてくれました。僕が答える前に横からご主人が「オレたちほど幸せな夫婦はいないぞ」と叫んでくれました。「でもね、僕が生まれて一年後に君が生まれられて、お互いに別々の人と結婚して、そして別れていろいろ苦勞して二人で出会つたよね。僕ね、君が生まれてきて今日まで生きてきてくれて本当にありがとう、そ

ターミナルケアと生死観

れだけは言っておくよ」と言ってくれました。奥さんも「ありがとう」と。これね、他の男性と結婚して暮らしていた時間もありがとうと言ってくれたんだよ。あなたの命そのもの全部、生きてきた命全部ありがとうと言ってくれたんですよ、ご主人は。「私もあなたが今日まで、三十九年生きてきてくれたことお礼を言います」って言ってました。その後少し彼女は意識を落としました。そしてそれから二十分くらいしてもう一回目が開きました。もう一回目が開いて何て言ったかという、「先生、三十八年の命でした。子どもが大きくなるまでもう少し生きていたかった。でも今度は向こうから見守っています。自分のことだけ言わせてくださいね、先生。あたしね、生まれてきて良かったよ。本当に今日まで生きてきてよかったよ」涙を流していますがニコッと笑って「先生、お忙しいんですから体に気を付けなきやダメですよ」ってどっちが病人か分からなくなってるんです。気を遣ってください。これが彼女が僕にくれた最後の言葉です。そして最後に一人残っていた保育園に行っている男の子の話をして今日の話を終ります。

保育園に行っている男の子は「〇〇くん、お母さんが長いこと入院してて寂しい

ね、辛いね」と言うと、「僕、寂しくないよ」。男の子です。強いんです。五つとはいえ。寂しくないよとみんなに答えます。ところがおうちを出る時に、こう言うんです。「ばあちゃん、僕の枕洗ったらダメだよ」って出かけるんです。お母さんの枕で三ヶ月寝てるんです。洗ったらお母さんの匂いが取れちゃうんです。そして髪の毛の汚れ、そしてよだれも出るだろう子どもだから。それでも洗っちゃダメなの。お母さんが取れるから。それから保育園に電話をすると、保育園では自由時間に皆で遊べなくなっているそうです。一人でポツンと遊んでる。大人でもそうでしょう。何か辛いことがあった時に「映画でも見に行こうよ」「今日やめとく」。同じ。子どもだってそう。辛い時は。でも子どもは「寂しいでしょ」と聞くと「寂しくないよ」とやるんです。さあ、この子どもはどうしようと思えました。言葉で励ませません。実はお経の中にこんな言葉があるんです。「煩惱の水溶けて」。仏様の優しさは私たちの煩惱の水を溶かしてくれるという言葉があつて、ふと思いました。そうか、この子の心は凍りついたような状態だ。その水を溶かすには「頑張れ」とか「元気出せ」って叩いたってダメ。そうじゃなくて、やっぱり氷は熱がないと溶けない。春にならないと雪は溶けな

ターミナルケアと生死観

いと同じで。そして僕は保育園の先生にお願いしました。「お母さんの胸がない子です。今おうちに。朝、登園したら十秒でいいです、十五秒でいいです、抱きしめてください」。「○○ちゃん、おはよ〜」毎日保育園の先生、交替でやってくれました。二週間くらいしたら集団遊びができるようになってます。「あ、お母さん、美味しそうだね」と看護師さんが声をかけます。「はい、○○ちゃん、お姉ちゃんは右足マッサージ、君は左足マッサージ」。お母さんの顔が弛んでいきます。こんなふうに子どもにもケア参加させます。「お母さんのこと心配ないよ。気にしないでいいよ」。心配な時に言ってしまう大人たちがいます。違います。子どもたちに、幼いなりに精一杯でできることをしてもらおうと考えています。精一杯でできることをしてもらいます。でない子どもが後できっと大人の言うことを信用しなくなっちゃいます。

まあ、最後に僕、皆さんにこんな言葉を提案して終わりたいと思います。「温もりと笑顔の中で」という言葉です。

「悲しくて切なくて凍り付いてしまった心に、いくら力を加えても砕け散った氷ができるだけ。凍り付いた心を溶かすのは温もりだ。温もりが伝わることによって心の

氷が溶けはじめる。そして笑顔が生まれる」

僕のこんなお話が、君たちにとって、自分の人生を少し考えてくださるきっかけになったら僕はとても嬉しいと思うし、今言ったこんな人たちが日本のあちこちで一生懸命生きていらっしやる。それを僕は今日は伝えただけです。

随分長話になってお許しをいただきたいと思います。本当に真面目に熱心に聞いてくださってお礼を言います。終わります。

——二〇〇九年六月二六日——